

山林地帯にはサンショウ類やキハダの葉を食べて成長するカラスアゲハやミヤマカラスアゲハ、ササ類が自生するところではゴイシシジミやヤマキマダラヒカゲが見られます。ゴイシシジミの幼虫は、ササ類に寄生するアブラムシ類をエサにする肉食性のチョウで、ほとんどのチョウの幼虫が植物の葉を食べて育つことから考えると珍しいチョウといえるでしょう。

5. 湿地・湖沼・川辺周辺のチョウ

生取村の山道には未舗装の部分が多く残され、また周辺から清いわき水が流れ出ているため、そのような

湿地や川辺にはチョウがよく集まり吸水しています。カラスアゲハ・キチョウ・テングチョウ・コムラサキ・サカハチチョウ・ルリシジミ・コチャバナセセリなどのほかにも多くのチョウが見られます。

薄暗い湖沼の周辺には、スゲ類の葉を食べて育つオオヒカゲや、暗い環境を好むクロアゲハ・クロヒカゲ・コジャノメ・ゴイシシジミなどが見られます。

また、明るい川辺や山道沿いの石垣や崖地付近にはクロツバメシジミが細々と見られますが、各地で激減したり絶滅しているので生息地を保護してゆきたいチョウです。



アブラムシ類の分泌液をなめるゴイシシジミ



キハダの葉で休むミヤマカラスアゲハの幼虫



湿地で吸水中のカラスアゲハ



路上の湿地で吸水するコムラサキ



スゲ類の葉を食べる
オオヒカゲの幼虫



オオヒカゲが生息する大座池の周辺



クロツバメシジミの生息地



生息地付近のトウモロコシの葉
で休むクロツバメシジミ

昆虫

生坂村は、川沿いの平坦部を除いて、土地が急な斜面であったり山地になっています。そのために、農薬や除草剤の影響を受ける土地が限られています。このことが昆虫にとっては、非常にありがたいことになっているのです。他の地域では、農薬や除草剤のために、以前はたくさん生息していたのに現在ではほとんど見ることができなくなってしまった昆虫もいます。

ここでは、生坂村で見られる昆虫について、いくつかを紹介してみたいと思います。

1. バッタ・コオロギ・キリギリスなどの仲間

バッタ・コオロギ・キリギリス・スズムシ・カンタン・カマドウマ・カマキリ・ナナフシムシ・ケラなどの仲間を直翅目（ちゅうし）といます。

この直翅目の仲間は、生活の場が草むらややぶの中なので、農薬や除草剤の影響を受けやすい昆虫です。

キリギリス(キリギリス科) 夏の暑い日差しの中で、「ギースチョン ギースチョン……」と鳴いています。生坂村の人は誰でも夏になると耳にする鳴き声です。生坂村の夏は、キリギリスの鳴き声とともにあるといってもよいでしょう。

松本平では、以前にはたくさんいましたが現在は、ほとんどその鳴き声を聞くことができません。農薬や路傍の除草剤の散布により死滅したり、路傍の整備により住む場所が少なくなったのが大きな原因です。

生坂村では特に、大日向区・宇留賀区・古坂区に個体数が多く、最盛期の鳴き声は一段とにぎやかです。

ウマオイ(キリギリス科) 8月下旬から「スィーチョン スィーチョン……」と鳴きはじめます。「ギースチョン」と鳴くキリギリスを「ギス」と呼ぶように、ウマオイは「スィーチョン……」と呼ばれ、キリギリスと同じようになじみの深い昆虫です。スィーチョンの鳴き声が聞けるころになると初秋となり、秋風が気持ちよく肌を感じられます。

このウマオイも、夏の代表のキリギリスと並び、初秋の風物詩です。しかし、残念なことにウマオイもだいぶ個体数が減ってしまいました。

ウマオイによく似たキリギリス科の昆虫で、ツムムシがいます。生坂村には、アシグロツムムシ・ホソクビツムムシなどのツムムシの仲間もたくさん住んでいます。

エンマコオロギ(コオロギ科) 秋に鳴く虫の代表です。「コロコロコロコロリー……」と玉をころがすような美声で鳴き、いちばん大型のコオロギです。

住んでいる環境は、草丈の低い草原、原野、田畑の土手などです。人家の付近から低山地までの広い環境に住んでいます。成虫になるまでに9回脱皮し、60～70日かかります。羽化するのは8月上旬から下旬です。雄は羽化後2～3日で鳴きはじめ、雌は羽化後3～4日してから交尾をはじめます。

地上だけに生活していると思われていますが、羽化後間もなくの間は、雌雄とも後翅で飛ぶことがあります。

エンマコオロギのほかに、コオロギの仲間は、ミツ



トノサマバッタ



キリギリス



ホソクビツムムシ

カドコロギ・オカメコロギ・ツヅレサセコロギ・シバズなどが住んでいます。

カンタン(コオロギ科) コオロギ科ですが、コオロギとはちょっと違った形態をしています。住んでいる環境は、草丈のやや高い草原・やぶなどで、特にクズの繁茂している所に多く住んでいます。クズの葉の穴の開いた箇所より頭を出して、「ルルルルル……」と鳴き続けている姿は、たいへんユーモラスです。

カンタンの交尾行動は、他の直翅目の仲間と違った行動が見られます。雄の鳴き声によって近づいた雌が雄の前翅のつけ根の後部にある“誘惑腺”と呼ばれている所から分泌された液を後方からなめ、交尾はその時に行われます。

産卵は主にヨモギの茎にします。産卵する時は、口で茎の表皮をかじり、そこに産卵管を差し込み、ヨモギのすいの中へ産卵します。1つの穴に1～5個の卵を産むことが観察されています。

キリギリスやスズムシは飼育されますが、カンタンを飼育したということはありませんが、カンタンも飼育してみたらおもしろいと思います。飼育するには、水で薄めたハチミツを脱脂綿に染み込ませたものとカツオブシを主に与えます。他に野菜くずを与えるとよいと思います。マウスに与える固形飼料でも飼育できます。動物質と植物質のえさをバランスよくあたえることが大切です。

カンタンが鳴くのは、8月中は夜だけですが、9月中旬を過ぎると昼も鳴き、晩秋には昼だけになります。

2. トンボの仲間

トンボの幼虫を“ヤゴ”とっています。ヤゴは水中生活をするので、水質の影響を直接受けることはいうまでもありません。「昔はいろんな種類のトンボがいましたが、今は種類も数も減ってしまった」という話を耳にします。確かにそのとおりです。ハグロトンボ(カワトンボ科)・カワトンボ(カワトンボ科)などは、小川にたくさんいたものですが、現在ではその数は激減し、全くいなくなった所もあります。農薬・除草剤・化学肥料などが水に溶け、ヤゴが住めなくなりましたからです。また、水田の区画整理や用水路の改修により、ヤゴの住む場所がなくなってしまったのも一因です。

生坂村には、大須沼池・大池などの池がありますが、農薬・除草剤・家庭雑排水の影響を受けないので、住みよい環境となっております。村内を流れる小川も比較的水質が良く、生坂ダムもトンボが住むのに良い環境となっております。



ツユムシ



エンマコオロギ(めす)



カンタンの交尾行動

コシアキトンボ(トンボ科) 生坂村ではかなりの個体数が発生し、未熟成虫は、日岐城跡辺りまで飛来します。

コシアキトンボのコシアキは「穢空き」の意で、腹部は黒色ですが、成熟した雄の第3・4節は白色になっていることによります。

幼虫は木陰のある水生植物の生育する池や沼に住んでいます。成虫は6月中旬ころから出はじめます。

ヨツボシトンボ(トンボ科) 前後翅に一对ずつの四つの斑紋があるので、この和名がついています。

県内の産地は、局所的です。生坂村では、大須沼池と大座池に住んでいます。生坂村の代表的なトンボといってもよいでしょう。成虫は5月中旬から8月下旬に見られます。このほかに、イトトンボ・サナエトンボ・オニヤンマの仲間などたくさんのトンボが住んでいます。



コシアキトンボのおす



ヨツボシトンボ



アキアカネ

3. セミの仲間

5月初旬にアカマツ林で「ムゼー ムゼー」と鳴くハルゼミの声にはじまり、夏の終わりから秋にかけてアカマツ林で「チッ・チッ・チッ……」と鳴くチッチゼミまで、春から秋の間、セミの声を聞くことができます。

ニイニイゼミ(セミ科) 梅雨明けのころ「ジ——」という鳴き声で鳴く、小型のセミです。

アブラゼミ(セミ科) 村内や山林で7月中旬ごろから鳴き出します。リング園にもたくさん集まります。「ジリジリジリ……」とうるさく鳴く声は、ミンミン

ゼミの「ミンミンミン……」と鳴く声とともに、夏の暑さをますます感じさせます。

ツクツクボウシ(セミ科) 「ツクツクホーシ、ツクツクホーシ……」と鳴くセミです。8月から9月初旬にかけて鳴き声を聞くことができますが、松本ではずっと少なくなり、塩尻ではほとんど聞くことができません。

その他に、エゾハルゼミ・エゾゼミ・ヒグラシなどの鳴き声を聞くことができます。



ニイニイゼミ



アブラゼミ



エゾゼミ

4. コガネムシ・テントウムシ・ カミキリムシなどの仲間



ハンミョウ

ハンミョウ(ハンミョウ科) 美しい翅を持った昆虫です。人の歩く先へ先へと飛ぶので「ミチオシエ」とか「ミチシルベ」などといわれています。傾斜地の礫の多い場所に住んでいます。幼虫は穴の中に入っていて、近づく虫を捕まえて食べます。

アオカナブン(コガネムシ科) 体長25~29mmで、光沢のある緑色をした美しいコガネムシです。カブトムシもコガネムシの仲間です。

ヨツスジハナカミキリ(カミキリムシ科) ノリウツギの花に集まります。花上に集まるカミキリムシは、マルガタハナカミキリ・アカハナカミキリ・ツヤクシハナカミキリなどたくさんの種類があります。

ここで紹介した昆虫は、ほんのわずかです。貴重な昆虫として、キカマキリモドキ(カマキリモドキ科)・キバネツノトンボ(ツノトンボ科)なども住んでいます。

コガネムシ・テントウムシ・カミキリムシのように前翅が堅くなっている昆虫の仲間を鞘翅目(甲虫類)と呼んでいます。

鞘翅目は大きさ・形態・色彩など様々で、住んでいる環境も千差万別です。

また、種類も多く日本では、現在までに約8,800種が記録されています。



アオカナブン



カブトムシ



ヨツスジハナカミキリ



キカマキリモドキ

キバネツノトンボの産卵



V. 気象 meteorological phenomena

12月に入ると雪の舞う日があります。雪が白く積もるのは、山の頂上付近から始まり、回を追って下りてきます。1月中旬ごろより曇天の日が続き、降水量も多くなります。2月初旬までの積雪量は、上生坂以北が多く、3月に入って上雪の季節になると、下生野以



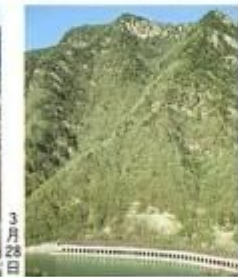
翠川への川霧 早春や秋に気温が下がり川の水温との差が大きくなると、川に接した空気から水蒸気が出て川霧が発生します。

南が多くなります。降雪が根雪になるのは、1月中旬ごろからです。冬の最低気温は、松本周辺より2度位高いのが普通です。積雪20cmを超える大雪となるのは、2月過ぎから3月中旬にかけて、年1-2回程度が普通です。

春は、動植物の休眠から覚めるのが松本周辺より早く、3月温田、用水路などの氷が溶けた暖かい夜、蛙の産卵するのが見られます。農作物の凍霜害の被害も、4月中旬からの低温によって起こります。

夏は、6月20日ごろより、ホタルが出てきます。梅雨明けより8月中旬にかけて、晴天が続く、降水量少なく、干ばつの害を受けることがあります。台風の被害は、地形上、風による害は少ないのですが、雨による土砂くずれや、河川の増水などがあります。

▼大城の四季(昭和63年)



3月28日

春の
コナラ林
5月4日

8月10日
29日

生坂ダムの貯水、11月3月の晴れた朝、気温がマイナス6度くらいになると、木の表面の温度も下がるので雪が融けて固体となり、木花が咲きます。

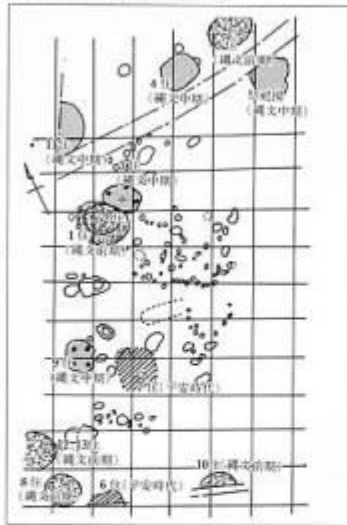


I. 考古

生坂の縄文人(八幡原遺跡-下生坂)-

1. わが祖先の人々

昭和62年、下生坂地区で掘場整備が行われました。ここでは以前から大昔の人々が残した土器の破片や石器がたくさん採集され、地中に当時の生活の跡が埋蔵されていることがわかりました。



縄文時代から平安時代の住居址



八幡原遺跡(下生坂)



雪にまみれて発掘調査



竹べらを使って大事に発掘



興味深い遺跡見学会

遺跡周辺の古老にお聞きすると、国道開通の折にも遺物や遺構が確認されたそうです。

この遺跡は遺構や遺物から、縄文時代早期(7,000年前)といわれるころから中期(4,500年前)のころにかけて、この犀川の河岸段丘上に生活を営んでいた人々のいたことがわかりました。しかし、その後、一時期、空白の時がありましたが、再び平安時代になっても居住していたことがわかりました。

この遺跡は異なった幾つかの時代にわたって集落を作ったという意味で複合遺跡といえます。特に県南部に発達した中越式(縄文前期-6,500年前)の土器や縄文人のネックレス(首飾り)になった緑青色のヒスイ、黒光りする黒曜石(石鉄=矢じり)がたくさん出土し、大町地方や諏訪地方など遠方との交流が盛んに行われていたことがわかります。

当時の地形は現在とほとんど変わってはいません。犀川面から一段と高い平地に集落をつくり、豊富な野山や川の産物を生活の糧として、7,000年前から現在に至るまでの長い間、人々は営々と生活してきたのです。

2. 信濃川流域最古の村

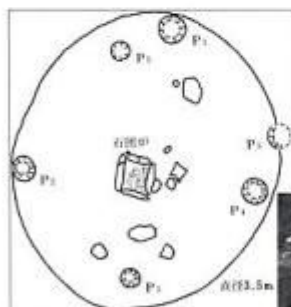
縄文時代早期末(7,000年前)から平安時代後期(800年前)までの長い間にわたる人々の生活がありました。

縄文早期末(7,000年前)、ファイアービット(2×1×1)と呼ばれるだ円形をした小さな竪穴です。人間がひとりやっと入れる位の広さと深さで、底面や東側の壁面には火を焚いたと思われる焼土が厚く堆積していました。

縄文前期前半(6,500年前)から後半にかけて6軒の竪穴住居があり、中期中ごろ(4,500年前)が5軒、さらに多数の土壇や墓塚などが発見されました。中でも注目すべきことは縄文前期初めごろに位置づけられ



縄文前期住居址 (6,500年前)



4号住居址
(縄文中期-4,500年前)



3号住居址 (縄文中期)



3号住居址 埋燵炉(縄文中期)

落共同体を営んでいました。

生坂縄文人は竪穴住居を造って生活をしていました。

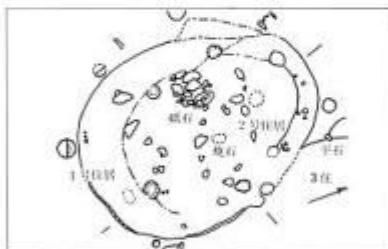
平面プランは方形、円形が基準で時代や地域によって中間的なだ円、隅丸方形などがあります。地表面を数十cmほど掘り下げ、平らな面を造り、その内側に4~7本の主柱を建て棟木をわかし、地面まで屋根をふきおろしています。土の中の温度が一定で、冬暖かく



ファイアービット (縄文早期末-7,000年前)

る住居址(中越式)が見つかったことです。

前期から中期中頃のころは現在よりも気温が高く、温暖な気候で、ドングリ・クリ・クルミなどの堅果植物の実がたわわに実のり、鹿・猪などの大型獣や他の小動物がたくさんおり、里川には魚類がおどり、四季を通じて狩猟や魚撈、植物採集をして生坂縄文人は村



1号住居址 前期後半
2号住居址 前期前半

夏は涼しく暮らしやすくできています。

縄文早期末の住居には炉がなく、睡眠と休息の場だけですが、前期のころになると炉が設けられるようになりました。中期以降になると家の中央部に方形、長方形の石囲炉、さらには鉢、甕などを埋めた埋燵炉が設けられ、炊事や明かりとりが家の中ででき、家族だけの生活ができるようになりました。

3. 縄文のまつり (大祭祀場)

縄文時代中期 (4,500年前) とはいば縄文土器の最も豪華なときです。

中期の初めには馬蹄形集落の中央に巨大な石棒が立てられ、共同祭式が行われていました。中期の中期から終末にかけては特定の住居内の一角に祭祀の場を備える例が多くなってきます。

ここ八幡原では中期の初めから終末に至る過渡期として、集落の中心に屋外の大祭祀場が作られました。



みごとに配置された遺構



祭祀場



山の幸、川の幸を盛った土器

石壇の両側にはほぼ原形を保つ勝坂式土器が置かれ、いま一つ、北陸系の火焔土器に似たこの辺では珍しい胎土を使った土器がつぶれた状態で置かれていました。

これらは供献のための特殊な器として使われていたものです。

坂道を下って右側には、みごとな硬砂岩製の石棒が横たえられています。頭部が形よく磨かれており、男性のシンボルそのものをみごとに再現しています。

これらの遺物は砂混じりの黒色土上に置かれています。硬い床面とは異なり、非常に軟らかい面をしています。

ここにはかみもありません。また、女性にかかわる土偶も出ていません。

この集落に住む人々は狩猟や採集の行われる季節の時々や仲間の生と死の折々に、両脇に備えられた器に清らかな崖川の水と獲物を盛りました。また、石壇には狩猟の用具を供え、祖霊神に祈り、男柱の神に豊かな獲物や新たな生命を産み出す力を願ったものと思われまます。

遺構はほぼ長方形をしています。北側が一段高く、緩やかな斜面をもって坂道が南へ降りています。

正面には石壇が設けられています。中央には石柱があり、左に円筒形の石棒 (花崗岩) が立てられています。この石棒は後出のものよりは小型ですが、石柱と同様に祖霊祭式の中心となる神として祭られていたものです。この石壇の前面には、2枚の平石が並行して立てられています。厚さ10cmと6cmのみごとな平石を使い、地中深く埋め込まれていました。



先端が磨かれた石棒



器面いっぱいにつかれたマジカルな文様

口縁部に浮き出た縄文のマムシ



流れるような文様が美しい土器

4. 縄文の土器

土器が生活の道具として使われるようになったのは、今から約1万年前のことです。

縄文人は野山の木の実や植物の根などを採集したり、狩猟や漁撈の生活の中でものを蓄えたり、煮炊きすることによっておいしく食べることを偶然にも知ることができました。

土器の形や文様は多種多様ですが、時代の流れとともに大きな変化をしています。

縄文草創期、早期(12,000年前～7,000年前)のころは丸底や尖底をしていました。そのころは移動の生活でしたから常時一定場所に置いて使用する必要がなかったのかもしれませんが、煮炊き用の深鉢が主体で文様は押形文や燃系文が施されています。

縄文前期(6,500年前)のころになると土器は平底となります。中には植物繊維などを混入したものもあり円筒形をしたものが多くなります。その表面には複雑多様な縄文が施されるようになります。

縄文中期(4,500年前)のころになると器形も大型

厚手となり、口縁部も外方にふくれ上がって巨大な把手や隆起線文という立体的な文様がつけられ量感にあふれてきます。早・前期の力強いが素朴で比較的単純な形態から、この中期の重厚で豪華ともいべき土器が作られるようになった契機は、生活の変化や精神的な大きな変化があったことと考えられます。

八幡原遺跡から出土した縄文土器の中で最も珍しいものは、北限としての中越式無文薄手土器です。

松本平では初めての出土で非常に貴重な土器です。また、前期の墓塚と考えられる土塚から出土した羽状縄文の深鉢、さらに、これも胆内の北限と考えられている焼町式及び新道式(勝取式)の中期の土器、さらには、思っばい極めて薄い前期前半の関西系の土器片がまとまって出土したことも珍しいことです。

関東・関西・北陸の各地域の土器が重なって出土したことは大変な発見でした。

なお、わずかではありますが、11世紀の平安後期の銅釜や須恵器片の出土がありました。



尖底土器(縄文前期-6,500年前)



羽状縄文がつけられた中越式土器(縄文前期)



3号住居の炉に使用された土器
(縄文中期-4,500年前)



縄文中期の土器